メトロポリタン史学会会報

第 16 号（2014.10.24）

発　行　メトロポリタン史学会

メトロポリタン史学会
第二回若手研究者の集いのお知らせ

昨年から新たな企画として始まりました「若手研究者の集い」が，来る２０１４年１１月２２日（土）に第２回目を迎えることになりました．この企画が若手研究者の発表と交流の場として定着することを願っております．若手研究者に限らず，多くの会員の皆さんの，奮ってのご参加をお願い申し上げます．

日　時　　２０１４年１１月２２日（土）午後１時～午後５時
会　場　　首都大学東京（旧東京都立大学）南大沢キャンパス　５号館１階１４２号室
（京王相模原線南大沢駅下車 徒歩約１０分）

【研究報告】

〔報告者〕

楊国棟氏（首都大学東京 大学院 後期博士課程修了）
「日露戦争期における清国の中立政策について」

黒沼太一氏（首都大学東京 大学院 後期博士課程）
「紀元前 4 千年紀ナイル河下流域における墓地と葬制
―ナカダ遺跡の学史的再評価と再分析―（仮）」

萩原弘幸氏（首都大学東京 大学院 後期博士課程）
「石製模造品出土遺跡の特徴を伴出遺物から検討する
―群馬県高崎市域を中心とした 5～6 世紀の遺跡群を例に―」

【書　　評】

〔報告者〕

古川隆久氏（日本大学 文理学部）
「上田誠二著『音楽はいかに社会をデザインしたか
―教育と音楽の大衆社会史―』新曜社，2010 年」

白川耕一氏（首都大学東京 都市教養学部）
「松本彰著『記念碑に刻まれたドイツ―戦争・革命・統一―』
東京大学出版会，2012 年」

※書評には著者も参加される予定です．また，シンポジウム終了後には懇親会を行います．

第７回歴史探訪

「国立ハンセン病資料館見学会」のお知らせ

第７回歴史探訪「国立ハンセン病資料館見学会」を以下のとおり実施しますので，お知らせいたします．

国立ハンセン病資料館は，はじめ高松宮記念ハンセン病資料館として 1993 年に開館し，その後名称を国立ハンセン病資料館と改めて，2007 年に再開館しました．

日本のハンセン病対策は，すべての患者を終生隔離するという「絶対隔離」の方針のもと，患者に過酷な生活を強いてきました．それは治療薬ブロミンの効果が確認された後も続けられ，1995 年に日本らい学会がこの過ちを認めて謝罪したことは皆さんご存じのことと思います．

今回の歴史探訪では，この資料館を訪ねてハンセン病治療の歴史の一端に触れ，その歴史的意味を考えてみたいと思います．当日の解説・案内を資料館学芸部長の黒尾和久氏にお願いしました．会員の皆さんのご参加をお待ちしております．

日　　時：１２月７日(日) １３時～１６時３０分

集合場所：現地集合(国立ハンセン病資料館入り口)

■バス

①西武池袋線　清瀬駅南口から

西武バス 久米川駅行き・所沢駅行きで約 10 分（「ハンセン病資料館」で下車）

②西武新宿線　久米川駅北口から

西武バス 清瀬駅南口行きで約 20 分（「ハンセン病資料館」で下車）

③JR 武蔵野線　新秋津駅から

西武バス久米川駅行き約 10 分「全生園前」下車，徒歩 10 分，または徒歩約 20 分

■所在地

〒189-0002　東京都東村山市青葉町 4-1-13

集合時間：１３時（食事をすませてきてください）

日　　程：資料館入り口外集合（13 時）→ガイダンスビデオ視聴・質疑応答→展示見学→現地解散（16 時 30 分頃）→最寄り駅で懇親会

講　　師：黒尾　和久氏（国立ハンセン病資料館学芸部長）

●参加ご希望の方は，１１月２５日（火）までに葉書もしくはメールでお申し込みください．その際，懇親会参加の有無をお書き添え願います．

メトロポリタン史学会第１０回総会・大会報告

2014 年 5 月 17 日（土）に，首都大学東京 南大沢キャンパス 本部棟 1 階・大会議室において，第 10 回総会･大会が開催されました．大会の参加者は 34 名でした．

まず午前 10 時 30 分から小谷汪之氏を議長に選出して総会が始まり，2013 年度活動報告，会計決算，監査

結果，2014 年度活動方針案，予算案，委員候補者が順次提案され，承認されました．議論では今後の会のありかたについて意見が出され，引き続き委員会で討議することが確認されました．

大会シンポジウムでは，「現生人類の北東アジアから日本への最初の進出―DNA 証拠，人類化石証拠，そして文化残滓証拠は同じストーリーを語るのか？―」というテーマで以下の 3 氏の報告が行われました．

出穂雅実氏（首都大学東京）
「最終氷期最盛期の北東アジアと古サハリン
―北海道－千島半島における狩猟採集民の技術的・行動的適応―」
海部陽介氏（国立科学博物館）
「東アジアの現生人類化石証拠とその系統」
安達　登氏（山梨大学）
「北海道の縄文時代人骨のミトコンドリア DNA 分析によって見えてきた北東アジア旧石器時代人の系統」

報告は，現生人類の北東アジアから日本へ進出という問題に関し，異なる分野それぞれの成果が互いにどのような貢献を果たしうるのかを確認する上で，有意義な問題提起となっており示唆に富み，全体討論も参加者を含めて活発に行われました．

メトロポリタン史学会第１０回総会議案書（２０１４．５．１７）

［メトロポリタン史学会　２０１３年度活動報告］

2013.4～2014.3

1．会誌『メトロポリタン史学』第 9 号を 2013 年 12 月に刊行し，史学科のある大学を中心に約 80 機関に寄贈した．
2．第 9 回総会・大会（シンポジウム「区切って領有するということ―領土問題への歴史学的アプローチ―」）を 2013 年 4 月 20 日（土）に開催した（参加者 40 名）．また，第 10 回総会・大会（2014 年 5 月 17 日，シンポジウム「現生人類の北東アジアから日本への最初の進出―DNA 証拠，人類化石証拠，そして文化残滓証拠は同じストーリーを語るのか？―」）を準備した．
3．第 1 回若手研究者の集いを 2013 年 11 月 16 日（土）に実施した．参加者 30 名．
4．第 6 回歴史探訪「登戸研究所にみる旧日本陸軍「秘密戦」の実態―明治大学平和教育登戸研究所資料館見学―」を 2013 年 10 月 6 日（土）に実施した．参加者 31 名，懇親会 13 名．
5．会報 14 号（2013.8.29），15 号（2014.3.6）を発行した．
6．会員数は現状維持にとどまり，拡大目標（165 名）を達成できなかった．

［メトロポリタン史学会　２０１４年度活動方針案］

2013.4～2014.3

1．会誌『メトロポリタン史学』第 10 号を 2014 年 12 月に刊行する．特集は，第 9 回大会シンポジウム「区切って領有するということ―領土問題への歴史学的アプローチ―」と，第 10 回大会シンポジウム「現生人類の北東アジアから日本への最初の進出―DNA 証拠，人類化石証拠，そして文化残滓証拠は同じスト

ーリーを語るのか？―」の各報告とする.

２．第 2 回若手研究者の集いを 2014 年 11 月 22 日（土）に開催する.

３．第 7 回歴史探訪を 2014 年 10 月 5 日（日）に実施する.

４．第 11 回総会・大会（2015 年 4 月 18 日）を準備する.

５．165 名を目標に会員拡大に努め，会財政の確立を図る.

６．必要に応じて委員の補充を行う.

［メトロポリタン史学会　２０１３・１４年度委員名簿］

任期：2013.4～2015.3

会　　長：佐々木隆爾

副　会　長：峰岸純夫，増谷英樹，小谷汪之

事　務　局：木村　誠（事務局長），前田弘毅，白川耕一，赤羽目匡由

編　　集：河原　温（責任者），奥村　哲，佐々木真，澤田秀実，月脚達彦，福田千鶴，出穂雅実

企画・研究：中野隆生（責任者），小野　昭，角田三佳，川合　康，橋谷　弘，林田伸一，山岡拓也

監　　事：義江明子，山田昌久

メトロポリタン史学会　２０１４年度予算

2014.4.1～2015.3.31

[収入]　852,555

前年度繰越金					43,555
会費					789,000
	一般会員	5,000	×	120	600,000
	学生・院生	3,000	×	12	36,000
	未収分	5,000	×	30	153,000
		3,000	×	1	
叢書販売		2,000	×	10	20,000
合計					852,555

＊予定会員数： 165名（一般 150，学生・院生 15）

[支出]　852,555

会誌制作費					500,000
通信料金					99,600
	会誌郵送	180	×	220	39,600
	大会案内・会報等発送				50,000
	葉書・切手				10,000
事務用品代					20,000
賃金・旅費					50,000
雑費					20,000
予備費					162,955
計					852,555

メトロポリタン史学会　２０１３年度決算報告

2013.4～2014.3

[収入]

			2013予算	2013決算
前年度繰越金			468,115	468,115
会費			789,000	720,000
	2007年度以前	(現金)	—	0
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	0
	2008年度	(現金)	—	3,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	0
	2009年度	(現金)	—	3,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	5,000
	2010年度	(現金)	—	5,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	18,000
	2011年度	(現金)	—	10,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	43,000
	2012年度	(現金)	—	25,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	126,000
	2013年度	(現金)	—	21,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	418,000
	2014年度以降	(現金)	—	0
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	43,000
雑収入			22,000	15,290
	会誌売り上げ		—	9,290
	叢書売り上げ		22,000	6,000
	銀行口座利息		—	0
計			1,279,115	1,203,405

[支出]

			2013予算	2013決算
会誌制作費			1,052,576	1,010,625
郵便料金			126,120	117,951
	会誌発送		66,120	60,186
	大会案内・会報等発送		50,000	33,980
	葉書・切手		10,000	23,785
	その他		—	0
事務用品代			20,000	1,867
賃金・旅費			50,000	5,000
雑費			20,000	1,407
	振込手数料		—	840
	弁当・お茶・紙コップ		—	567
予備費	懇親会会場運営費		10,419	23,000
次年度繰越金			—	43,555
	現金		—	11,241
	銀行		—	12,174
	郵便振替		—	20,140
計			1,279,115	1,203,405

※この他に，佐々木隆爾，小谷汪之両氏より各 150,000円 の借入金がある．

●会員数 150名（一般140名　学生・院生 10名）

●会費納入率　13年度・91/150=60.7％　12年度・102/150＝68.0％　11年度・121/153＝79.1％　10年度・128/154＝83.1％

【シンポジウム参加記】

第 10 回大会シンポジウム「現生人類の北東アジアから日本への最初の進出―DNA 証拠，人類化石証拠，そして文化残滓証拠は同じストーリーを語るのか？―」の参加記が役重みゆき氏から寄せられました．お忙しいにもかかわらず原稿を執筆してくださった役重氏にお礼申し上げます．

「第 10 回総会・大会」参加記

東京大学大学院人文社会系研究科
基礎文化研究専攻考古学専門分野博士課程　役重みゆき

概要

2014 年 5 月 17 日（土），メトロポリタン史学会第 10 回大会において，シンポジウム「現生人類の北東アジアから日本への最初の進出」が開催された．考古学，分子遺伝学，形質人類学の研究者が上記のテーマに関する互いの分野の最新の知見を紹介した後，共通の問題点について率直に語り合うという形式のシンポジウムは，周辺地域で新出資料が増加している現在，時宜を得たものであったと言えよう．

本シンポジウムの冒頭で主催者である首都大学東京の出穂雅実准教授より本テーマにおける研究疑問が提示された．これらの研究疑問への解答が本シンポジウムで全て示されたわけではないが，これらの研究疑問は今後も解答を模索していくべき重要なものであるため，ここで提示しておく．

(1)現生人類はいつ北東アジアに出現したか？，(2)現生人類はいつ北東アジアから古サハリン‐北海道‐千島半島に進出したか？，(3)古サハリン‐北海道‐千島半島に出現した現生人類はどのような技術的・行動的適応によって植民を成功させたのか？，(4)植民を成功させた現生人類は，その後どうなってゆくのか？

まず，出穂雅実准教授より「最終氷期最盛期の北東アジアと古サハリン‐北海道‐千島半島における狩猟採集民の技術的・行動的適応」と題する発表が提供された．北東アジア地域の上部旧石器時代研究の重要な論点として，(1)ユーラシア大陸への解剖学的・行動的現代人の拡散と文化的多様性の形成，(2)ユーラシア大陸の高緯度寒冷地域への技術適応行動の二点が挙げられ，当該地域の最新の研究がわかりやすくレビューされた．北東アジアにおける集団の移動はアメリカ大陸への初期移住論と密接に関わっており，議論の焦点は最終氷期最盛期（以下 LGM）における細石刃技術の出現と拡散であるとされる．考慮すべき点として，シリアと日本の LGM 年代観に大きなギャップがあることが指摘されるなど，発表の構成は詳細かつ丁寧なものであった．

次に，国立科学博物館の海部陽介博士より，「東アジアの現生人類化石証拠とその系統」と題する発表が提供された．現生人類の拡散について現在まで得られている人類学的証拠が整理され，次いで日本と周辺地域の最新の化石人骨出土状況やそれらの年代的位置づけが紹介された．また，沖縄県の港川人骨の最新の研究成果として，東部アジア地域で最も完全な旧石器時代の人骨化石であること，接合し直された下顎骨を縄文人と比較することにより，港川人は南方起源でアジアの古い拡散集団に由来している可能性があること，縄文人の祖先というよりは，日本列島へは複数回の移住があったと考えられることが示された．

最後に，山梨大学の安達登教授より「縄文時代人骨のミトコンドリア DNA 分析によって見えてきた北東アジア旧石器時代人の系統」と題する発表が提供された．議論を理解するために必要な，ミトコンドリア DNA やハプログループという用語についての詳細かつ平易な説明があった後，北日本先住民集団の成立過程について最新の研究成果が報告された．北海道・東北地方の縄文人骨のハプログループを検討した結果として，アムール川下流域から集団の入植があり，それを母体に北海道・東北地方縄文時代人が形成された可能性が高いこと，北海道・東北地方縄文時代人は，ユーラシア大陸北東部の旧石器時代人の遺伝的特徴を色濃く保持している可能性があることが報告された．

全体討論において，上述の発表に基づき発表者相互の問いかけや会場からの質問を通して異なる分野の研究成果を相互に利用する際に生じる問題を浮き彫りにすることができたことは，本シンポジウムの成果である．その問題とは二つの階層からなる．まず一つは，各分野の資料的限界の問題である．考古資料がダイレクトに人種や集団を語ることはほとんどないものの，扱えるデータの量や地理的範囲は上記三種類の分野の中では比較的大きい．一方，分子遺伝学，形質人類学は，化石人骨や DNA の残存しやすさは地域や時代によって大きく異なっているものの，人種や集団，個人について直接議論することができる．各分野にとって良好な資料がうまくかみ合って出土する地域は極めて稀であり，そのことがすりあわせを難しくしている．もう一つは，異なる分野の資料や分析結果を利用する際の，利用する側の研究姿勢の問題である．資料の性格と分析結果が導き出される仕組みについての知識を持たず，分析結果の信頼性を考慮しないまま自らの研究分野にとって都合の良いデータのみを利用することは，その分野の研究にとって致命的な停滞を引き起こす可能性がある．

こうした問題を解決するにあたり，明確なテーマ設定や問題意識のもと，複数の研究分野の研究者が互いの知見を示しあう目的的なシンポジウムはうってつけの場である．とかく個別の研究分野の中で議論されがちなテーマに対し，各研究分野間で整合性のある仮説の提示を目指すことを大目的とし，異なる分野の研究者が率直に互いのデータの整合性や自身の対象資料が示す情報の限界について議論しあう様子を見聞できる機会は少なく，得難い経験となった．

末尾ではあるが，本会の一層の発展をお祈り申し上げ，参加記を締めくくりたい．

【提　　言】

ジェンダー研究から源氏物語と古註の超高級文化を復元する途へ

橡川一朗

はじめに（私の研究体験と源氏物語論）

本誌９号〈特集１〉の高松百香論文「女院の成立と展開――ジェンダーの視点から――」は，一条天皇の中宮（皇后）彰子が天皇死去後，最初の正規女院として政治の表舞台で活動した事実を明らかにし，いわば逆ジェンダー現象を浮かび上がらせた点が新鮮に映った．そこから更に，彰子の侍女だが師でもあった紫式部とその名作『源氏物語』を頂点とする中世日本の「超高級」文化を復元し，それに伴なって究極の逆ジェンダー史を切り開く途をも，考えてみたい．

私は西洋史を専攻し，とくにドイツとフランスの中世農村社会を比較して，北フランスで農民の小規模奴隷所有が十三世紀ごろ解体して農奴制社会に移ったのに対して，ドイツでは，家父長的奴隷制の形で凡そ十八世紀まで存続したことを論証した．そのためにはグリム（兄）編『ワイステューマー（町村法集）』等を解読して多数の証拠を示したつもりである（『西欧封建社会の比較史的研究』[*1]＝拙著１）．その解読結果は，日本の西洋史学会で殆ど無視されたが，それはオーストリアを含むドイツの歴史学界に根づく頑強な自国奴隷制否定に，由来したと判断される．

対称的にフランスでは十九世紀いらい自国の奴隷制にかんする研究が目立ち，その伝統は二十世紀に入っても失われていない[*2]．その原因は，大革命（一七八九年）いらい確立された民主主義の国としての誇りと，文化大国としての面目に，磨きをかけようと，自国史の汚点を探り，その遺制をも根絶したいという「真の愛国心」が自国奴隷制の研究となったと見られる[*3]（「フランス＝文化大国」論の好例を挙げれば，ドイツの国際的大作家トーマス・マンは小説『詐欺師フェリクス・クルルの告白』で主人公に「フランス人はフランス語だけが人間の言葉だと信じているが，残念ながら我ら諸国民は彼等の自負を承認せざるを得ない」と言わせている[*4]）．

しかしドイツ史学の主流派は，フランス・イギリスとアメリカ東部の知識人が高く評価するドイツの二大思想家ルター・カントを敬遠（ないし忌避）して，自国文化への真の誇りを失う結果となり，偏狭な愛国心に駆られて，自国の汚点（奴隷制）を否定し続けている，と言える．

ところで，わが日本史学会でも故安良城（あらき）盛昭氏の「中世農民は家父長的奴隷所有者」という主張に対して，とくに中世史学者から反対論が続出した．しかも，そのなかには反体制派と自認する人々も混じっていたので，私は反対論の根拠を，あらかた想像しつつも，判断に苦しんだ．

そこでドイツ史学の歪んだ文化史観を思い較べつつ，奴隷制論争の枠の外に視野を拡げてみた．すると，そもそも日本の近現代文化が，じつは高度な文化的背景をもつ源氏物語とその享受の歴史を，あえて忘却し，その穴を，次善の文化で埋めてきたのではないか，と感じはじめた．

その契機は，歴史学研究会から，当時大評論家とされた小林秀雄の大著『本居宣長』への書評を依頼されたことである．私は驚いたが，私の「比較史」という方法が文化史にも通用すると過信されたらしいとも思い，それなりの責任を感じて書評を引き受けた．

さて小林の退屈な宣長論中，いくらか面白そうな部分は，宣長の源氏物語評『玉の小櫛』への小林の感想だと思ったので，宣長・小林両者が，ともに屢々言及する『湖月抄』（北村季吟著，一六七三年）を，まず読んでみた．―こうして湖月抄所収の物語原文と所謂「古註」を読むうちに，私は大学院生のころ谷崎潤一郎の現代語訳と某社刊の原文を読んで得た『源氏』観が極めて浅薄であったことに気付き，恥じ入った．つまり源氏物語は思想小説であり，「古註」は，それを指摘しつつ物語の作者紫式部を，讃美してやまない（摂政・関白を歴任した『花鳥余情』の筆者一条兼良以下，古註の著者たちは，ジェンダー意識を超越して紫式部の思想と文才を褒め讃え，現代のフランス文化と較べても最高級の文化を築きあげていた．私は，中世の日本が享受していた超高級文化に，この時はじめて気付き，書評依頼の幸運を喜んで筆をとった）．

私の書評の要旨は，宣長は古註の意義を矮小化し，小林はそこを見落とした，ということである[*5]．この書評は甚だ不評だったらしいが，友人の計らいで『近代思想と源氏物語』（一九九〇年，拙著２）に主旨を盛ることができた．表題に「近代思想」と入れたのは，源氏物語の文学理念が，現代の文化大国フランスの誇るデカルトの「認識論」とパスカルの「罪の意識」を，先取りしていたと言いたかったからである．ところで今の我々日本人は，わが国最高の古典『源氏』とその古註の思想を，デカルトとパスカル（ドイツではカントとルター）を介してしか理解できないのが実情である．以下，その点を考慮しながら源氏物語と古註の世界を復元する試みを提示したい．

西洋近代の二大思想と源氏物語の文学理念

ルターの宗教改革（一五一七年～）は，中世の西欧で唯一・最大の宗教キリスト教の分裂を招いただけでなく，広く思想界に混迷をもたらした．しかも、その混迷をさらに深めたのはフランスのモンテーニュが提示した「懐疑論」であった。――その懐疑論を正面から受け止めて，これを克服したのが同じくフランスのデカルトである（だがデカルト哲学は今の日本人には苦手ならしく，適切な解説書が見当たらないが，とりあえず拙著２〔一一七ページ以下〕を一読されたい）．

デカルトの懐疑論克服の論理（認識論，理性主義）は，イギリスのロックとドイツのカントに引き継がれて完成されたが，その間にロックの民主的政治学を生んで近代社会科学の発展に寄与し，さらに理科系「科学」に哲学的根拠を与えて，近代文明の成立に大きく貢献した．

ところがインドでは，デカルトより二千年前に，シャカが先輩サンジャヤの懐疑論を克服していたのである．それは初期仏教研究家の宇井伯寿の論文を，西洋哲学専攻の和辻哲郎が解説したおかげで判ったことであるが[*6]，この仏教認識論は中国を経て日本にも伝わり，平安時代には都の貴族たちにも理解されていた．紫式部は，それを源氏物語に反映させており，さらに物語の注釈家たちも，そこを解説しつつ作者の知性を絶賛している．

つぎに近代的「罪の意識」は，かの宗教改革者ルターの著『奴隷意志論』（一五二五年）に始まり，各個人の宗教的責任感を強調して，近代民主主義の基礎となる自覚的「自我」の確立に役立った[*7]．しかも，それは更にフランスのカルヴァン，オランダのヤンセン（ジャンセン）を経て，フランス人の敬愛するパスカルの深い思索を喚起した．

そのうえカルヴァン・ジャンセン的「罪の意識」は，フランス革命の精神的「父」と言われるルソーの『懺悔録（告白）』を生み，それが近代西洋文学を代表するロシアのに大作家ドストエフスキーとトルストイの文学理念ともなった．

さてシャカの認識論は，その出発点（懐疑論）が政治的弾圧を受ける恐れがあったため宗教化して「仏教」となり，中国にも受け入れられた．やがて，そこから「罪の意識」が生まれて，とくに日本で深められた．亀井勝一郎によれば，その深まりに大きく寄与したのが源氏物語で，しかも，いわゆる古註は，物語全編の筋立てに，いわば近代的な「罪の意識」を見出している．

すなわち主人公の光源氏は，父帝の新中宮（藤壷）と密通して儲けた男子を天皇（冷泉帝）に仕立てて栄華をきわめたが，晩年，正夫人に迎えた兄帝の姫（三の宮）に裏切られ，ようやく父帝の苦悩に気付いて，深く悔いる．――古註『細流抄』（十六世紀）は，そこに因果の道理つまりドストエフスキーの名作『罪と罰』の題名と同じ思想を，読み取ったのである．

なお罪の意識が政治批判に通ずる例として，シェークスピアの傑作『ハムレット』が挙げられ，また源氏物語の批判精神は，前記『花鳥余情』の著者が称揚した．

以上のように，世界文化史的な意義をもつ『源氏』文化の思想的背景が，ここ二百年来忘れ去られたことは，まことに残念だったが，さいわい近頃，源氏物語そのものは各種の現代語訳で広く読まれるようになった．この上は「古註」を含めた源氏文化が復元され再評価されて，真に国民的な誇りが回復され，ひいては，源氏文化の忘却につれて強まったらしいジェンダー差別観の，根治が図られてよいのではなかろうか．

註

＊１　拙著１の初版は一九七二年，増補改訂版は一九八四年刊．

＊２　とくにドランジェル著（一九四九年）は拙著１に紹介．

＊３　コシャン『奴隷制の廃止』（一八六一年）．――拙稿「奴隷制論」（安良城盛昭〔下記〕遺著『日本封建社会成立論，下』〔一九九五年〕付編）一九一㌻．

＊４　マン同書（一九五四年）中，大意紹介の箇所は髙橋義孝訳『マン全集　Ⅶ』三三五㌻を参照．本稿中の「残念ながら」は，原文「ウンウィルキュールリヒ」の訳．

＊５　拙稿（書評）は『歴史学研究』四九一号（一九八一年）所載．

＊６　宇井の関係諸論文は，同氏著『印度哲学研究，二』（一九二五年）所収．和辻著は『原始仏教の実践哲学』（一九二七年）．

＊７　メーリング『ドイツ史　Ⅰ』一九一〇年．著者はドイツには珍しい国際派歴史学者．

＊８　亀井『日本人の精神史研究，中』（一九六二年）．――源氏物語の文学理念を西洋の近代思想から捉えた功績は絶大．

【投稿のお願い】

本会では，会員の皆様の積極的なご寄稿をお待ちしています．広く，歴史研究・教育の諸領域にかかわる内容のものを求めます．

『メトロポリタン史学』（The Metropolitan Shigaku）投稿規定

(1)　本誌は，年一回 12 月に発行するものとし，原稿の締切は，毎年 8 月末日とする．

(2)　投稿資格は，原則として会員に限る．ただし，編集委員会からの依頼原稿に関してはこの限りでは

ない.

(3)　投稿言語は，日本語または英語とする.

(4)　投稿原稿は，歴史学・考古学，歴史教育の分野に関する以下の種目のものとする.

①論文（図表を含み，24,000 字以内；英文の場合は，8,000 語以内）

②研究ノート・史料紹介（同　12,000 字以内；英文の場合は 4,000 語以内）

③学界動向（8,000 字以内；英文の場合は 2,700 語以内）

④時評・提言（4,000 字以内）

⑤書評（4,000～8,000 字）

(5)　論文，研究ノート（縦書き，横書きいずれも可）には，欧文で要旨（300 語以内）を添付する（原文が英文の場合は日本語要旨 800 字以内）．また目次用の英文タイトルを付記する.

(6)　原稿は，編集委員会が採否を決定する．その際，論文，研究ノートについては，編集委員会および編集委員会が委嘱した査読者の審査を経る.

(7)　著者校正は，初校のみとし，校正時における文章の大幅な変更は認めない.

(8)　注は，末尾にまとめる.

(9)　原稿は原則として，印字された原稿（表，図表を含む）3 部，USB メモリなどの記憶媒体及び別記送り状*（1 部）を提出する.

(10)　掲載の論文，研究ノート・史料紹介，学界動向については，別刷り 50 部を進呈する.

(11)　原稿の送り先，照会については，

〒192-0397 八王子市南大沢１－１　首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系
国際文化コース（歴史・考古学分野），河原 研究室気付
『メトロポリタン史学』編集委員会
Tel: 0426-77-2119（河原研究室）　Fax: 0426-77-2112
E-mail: kawara28@tmu.ac.jp（河原温研究室内）SNC47077@ nifty.com（河原温）

＊ 送り状は学会ホームページ（http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/）からダウンロードしたものをコピーするか，事務局にお問い合わせください.

【事務局からのお願い】

●メトロポリタン史学会会報第１６号をお届けします.第２回若手研究者の集いと第７回歴史探訪のご案内をいたします．奮ってご参加ください．引き続き会財政健全化のため，年会費を年度内にお支払い下さいますようお願いします．一般 5,000 円，学生・院生 3,000 円です.

メトロポリタン史学会（会長　佐々木隆爾）
〒192-0397
東京都八王子市南大沢１－１
首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 国際文化コース 歴史・考古学分野内
TEL：0426-77-2110（木村誠研究室）　E-mail：mshigaku@tmu.ac.jp
ホームページ：http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/
郵便振替：00100-0-537287　メトロポリタン史学会